

野々美谷。勝岡梶山山之口。梅北恒吉末吉まで。都合十二の砦を搆へ。龍の雲を起し。虎の風を呼ぶ勢にして。白石永仙を初とし。那答院左近伊集院新右衛門尉。比志島式部少輔猿渡肥前守。伊集院掃部之介倉野七兵衛。伊集院兵部少輔忠吉。忠真が弟伊集院小傳次等。都合其勢二万餘騎。砦々に馳集り。籠城の用意をなして。島津の屋形に。弓を引どの聞へあれば。君聞召され以の外御立腹をなされ。其儀ならば早々討手を差向け。源次郎忠真が首を刎。實檢に備へよどの御詮なれば。先一番に島津中務少輔忠豊。島津

圖書頭忠長。新納武藏守忠元。樺山權左衛門尉久高。比心島紀伊守國貞。喜久攝津守忠政。伊勢兵部少輔貞昌。阿多長壽院盛淳。山田昌巖押川強兵衛。村尾源左衛門松清等。物に馴たる屈竟の兵馳集り。残る處なく手配して。軍慮の指揮をなし給ふ。爰に又北郷作左衛門尉元久は。北郷長千代丸を引立。數千餘騎を隨へ。都合其勢拾萬餘騎。甲の星を炎天に輝し。旌差物を嵐に翻し。同六月上旬吉日を撰ばれ。君の御馬を出させ給ふ事。切左も勇々敷ぞねにける。是は扱置爰に又。いと哀れを止のしは。平田三五郎

宗次にて。平田太郎左衛門増宗の息男とかや。干今年三五の秋の月。雲間を出る風情より。猶あてやかに麗はく。容色無双の少年なり。吉田大藏清家と。兄弟の契り淺からず。共に故郷を出しより。片時も側を相去らず。栖按山路を分る日も。同じく迷ふ馬蹄の塵軍旅野外に屯せば。同じ褥の假枕。共に詠むる夜半の月。いはんや合戦の場迄も。同じ道にと心ざす。されば宗次は。いつにすくれて花やかに。先肌よりは伽羅の匂ひの肌寄に。春の野の柳櫻を縫出したる。薄紅梅の直垂に。卯の花威の鎧着て。態と甲は召さ

りしが。金作の太刀。帯ぎ。鹿毛なる駒に。梨地の鞍。置き。縁の黒髪振分け。平安城長吉が打たる。大身の鎗を携へ。今ぞ出陣に成ぬれば。母上の前に膝まづき。今生の暇乞を述べれば。母上は只泪にくれ。暫し言葉もなかりける。嗚呼親子の別れはど。何に譬へん方もなし。哀れ貴きも賤きも。子を思ふ道に迷ふとは。今こそ思ひ知られける。親の心はかく迄も。勇み立たる宗次は。駒に打乗り急かる。に。吟。又も母上呼返し。宗次殿必ず合戦の期に望み。未練な事はし給ふな。骸は戦上に朽るとも。名は末代に残るべ

しと。聲も枯野のさりとす。泣わめさてぞ申さるる。されば宗次は兼て覺悟の前なれば。何のいらへもなく只茫然として居たりしが。振り分る黒髪の鎧の袖に。泪と共にはらくと。乱れかゝり。形勢は。さながら楊柳の雨に添ふて。春風に打靡く風情なり。扱清家は兼て期したる事なれば。共に打列れ急かるゝに。爰は早や敷根の里になりぬれば。音に聞へし門倉薬師に參詣せん。諸共に駒より飛び下り。うやく敷も南無薬師尊と合掌し。此辻堂に逍遙して。一首の歌をつらねける。

書きおくも形見となれや筆のあと

我れはいづくの土となるらん

と矢立を出し。清家宗次を抱揚て。筆先き高く天井の。板の表にしるし置き。又此度庄内一乱により。清家宗次列合戦に趣と。堂の柱に書付しは。末の代々でも留りて。切見る。袖を絞りける。共に踏出す武者鞋。結び合せて行先のほまれは後に知られたり。

形見櫻(第二段)

去程に。清家宗次打列。遙々と急かるゝに最早。切「都の城に成ぬれば。干」柳川原の邊にて。春田主左衛門道春に行逢しが。こは如何に。清家宗次殿にてましますや。嗚呼羨しき形勢かな。某も御存の通り。内村半平。兄弟の契約致し。春は花秋は月見に詩歌を吟じ。武士の勇める道を。勵み合樂みけるに。はからずも此一乱到來し。矢猛心の梓弓。互に敵味方と引別れ。今は半平が身の上。餘り床敷思ひし故。志和地の城主伊集院掃部之助に訴へ。御内の内村半平と。拾四歳の春の頃より。兄弟の契約致せしにより。一日の對面

を許し給へば。生涯の本望なりと。思の程を深く書込し。矢文を以て乞けるに。掃部之助いと愛着の實情を感じ。いと情ありて此程。柳川原に於て頼みある中の酒宴致せしに。何語るべき暇もなく。別れの盃さすが又。いつか其日も吳羽鳥。切「あやにくも泣て別れの哀れなり。泪川其源を尋ぬれば。誰か誠より出ぬらん。又古歌にも。

逢ふ時は語り盡すと思へども  
別れになれば残る言の葉

人身の上にしら雪の。つもる思は此道春が胸のやみ。海人

の焚火にあらねども。夜はこがれて螢火の。消て飛立かたもなしと。清家が鎧の袖をひかへ。道春がさめぐと泣ければ。清家共に涙を流し。互に此場を別れける。崩斯かる處に。敵の鯨波の聲。矢叫びの音。夥敷聞へければ。清家宗次諸共に。駒を馳出し。寄來る敵に打向。清家が乗たる駒は逸物なれば。思はずも宗次二町許りおくれけるに。とある木陰より。はやりをの若者共五六人。宗次を見掛け。天晴れ類ひなき美少年かな。いで生捕にして。夜の衾を一つにして慰み物にせんと。大手を廣げて取てかゝる。宗次

聞くよりも。何それがしを生捕。慰みものにせんとや。汝等如き者共に此宗次がおめくと。捕へらるゝ者かはと。緑の黒髪逆さまに。立向ふ敵五六人。突伏切伏。車輪の如くに切り廻る。恰かも鬼神を取ひしく勢ひなれば。今は敵兵叶ふまじとや思ひけむ。逸足出して逃て行く。宗次見るより。最前の廣言にも似ぬ臆病者共。返せ戻せと聲をかけ追かけ、れど。臆病神に誘はれて。跡をも見ずして逃て行。心の程こそ淺ましけれ。宗次は朱に染めたる大身の鎗を。流るゝ水に打そゝぎ。切暫し息をどつきにける。去程に清

家は。家に傳りし重藤の弓の真中握り。大中黒の征矢を負ひ。黒革絨の鎧着て。五枚甲の緒をしめ。月毛の駒の太く逞しきに、乗りたりしが。大勢の中に取籠られければ。崩しても今は叶ふまじと。小高き丘にかけあがり。大音揚て名乗様。某は島津方に於て。吉田藏清家と申者なり。強弓の精兵矢つきばやの手利なり。かゝる矢先に敵は嫌ふまじと。五人張に十五束。受取引詰射る程に。群る敵をあだ矢なく。三十六騎は射て落す。既に矢種も盡きぬれば。持たる弓をからりと投捨。敵中に切て入る。元より清家は。

丸目藏人頼則が門人にて。體捨流の達人なれば。右に切左に切て廻り。當るを幸ひ突伏切伏。恰も虎の荒るゝに異ならず。されは敵兵是にあぐみ果。手詰の勝負は無益なりと。鐵砲の音鈴四五挺を相すぐり。鈎瓶かけて打ければ。流石清家も鐵壁にあらねば。胸板を射抜かれ。遂に財部の朝の露と消にける。今を盛りの生年二十八。切惜まぬ者こそなかりけれ。斯る處。清家が郎等。佐藤兵衛武任は。主人清家が死骸を肩にかけ。味方の陣に退しに。頓て宗次歸り來て。扱は清家殿最早打死召れたるや。死なば一所と思ひ

しに。合戦に暇なくして。後れしこそ無念なれど。其儘駒より飛び下り。吟「清家が死骸に抱きつき。打しはれたる卯の花絨の鎧の袖に亂髪。世にあるうちの言ひ替し。桃李は物は言はねども。今に最後の色見ぬて。跡に残りし紅葉はの。散るも惜まぬ太刀の柄。是迄なりと思ひ切り。崩「武任さらばと言捨て。駒引寄せ打乗り。大音揚て名なる様。某は島津方に於て。平田三五郎宗次なり。手并の程を見せんとて大身の鎗を駒の平首に引め。當るを幸ひ突伏切伏。必死になりて戦へば。敵數討取り。我身にも數。所の疵と

蒙り。哀れ三五の秋の空。替り行く世の習ひにて。一陣の風に誘はれ。義の爲に骸。戦士に晒し。百年の齡をちいめ。切「終に財部の草葉の露と消ぬにける。今を盛りの花衣。着て見る人々。鎧の袖を絞りけり。

形見櫻 (第三段)

爰に又。新納武藏守忠元は。文武二道に達し。切「和歌の道にも長したる身なりしが。干「此度の合戦に。粉骨を盡し。八旬に垂々として。山田の城を責落し。比類なき働きあり

しも。兼てより我軍卒の武勇を賞美し。仁愛深く恩賞を與へ。なづけ給ふにより。向ふ所敵なく。我手足を仕ふ如くにして。數ヶ所の合戦に譽を顯し。假にも敵に押付を見せたる例なければ。近國他國に隠れなく。切「武勇の程ぞ聞ゆる。手」是は扱置爰に又。分て哀れに聞ゆるは。富山次十郎とて。生年二八計と打見ゆる。容顏美麗の少年なりしが。花やかなる鎧を着て。一陣に進み出。天晴勇々敷見ゆるたりしが。痛しや敵の放てる鉄砲に。眞只中を打抜れ。果敢なき最期は財部の。草葉の露と消ゆるにける。是を聞より忠元

は早くも尋問はれしに。蘭麝の匂ひ消ゆる。蓬が本に打伏して。玉の様なる顔も。忽ち消ゆる雪霜の。氷の肌へと冷渡る。姿となりてあぢきなや。吟朝には紅顔のりて。世路に誇れども。夕には白骨となりて。郊原に朽ぬ。されば詩の心にも。同じ思ひの苔蘚。露を片敷草枕寝みたれ髪は打解た。姿と見えて秋の野の。千種にすだく蟲の音ど。な。く。死骸を埋め置き。落る涙を押拭ひ。一首の歌を詠じ。追善に備。給ひける。

きのふまで誰が手枕に亂れけむ



よもぎがもとにかゝる黒髪

とつらぬ置き。手向の水をそゞぎ。暫し回向をなしにける。去れに形見の櫻。誰が此里に植へ置て。名も財部に匂ふらん。聞く人見る人諸共に。切涙は袖にあまりける。嵐斯かる折しも諸々の陣。山田安長志和地の城。合戦はげしく太刀打の。鏑を削り鏝音の。轟く駒の足並も。揃ひ兼たる敵味方。命は鹿芥より軽く。義は金鐵より重くして。死骸の上を乗越ぬ乗越ぬ。我劣らじと戦ひしは。いつ果べき軍とも知れざりける。又は白石永仙。姦計に落入。味方の勢

も數多損じけれど。同じく十月上旬森田に御陣を移させ給ひ。志和地の城を取圍み。晝夜を分たす責給ふ。先一番には島津中務少輔忠豊。入來院又六重時。阿多長壽院盛淳。又は内府公の御加勢透間もなく。素より井樓を揚たりければ。敵の城内眼下に見下し。敵地の案内を。能々知り給ふ故。弓鐵砲の矢先を揃へ。狙ひ詰て討程に。討るゝものは數知れず。又は兵糧の道を取切。俄に及ぶもの數多ありて只やみくゞと城を明渡。切落て行こそ哀れなり。去程に内府公。庄内合戦の注進を聞召され。山口勘兵衛直友。和

久甚兵衛兩人を差下され。和睦降參致可くこの命を蒙り。一命を助け置べきとの御事なり。其時忠真は都の城。兎に角堅めけれど。邪は正に敵し難く。拾二の砦も過半落城に及び。日々兵氣も衰へ。只術計に盡果し折節なれば。こは如何に有難き御誼なりと。快くも畏り。頓て君の御前に罷出。甲を抜て降參の趣。後悔。色を顯して申上れば君聞召され。汝が日比の逆罪深しと雖も。内府公の命により。又は當家の門葉。先祖の舊功捨て難く。殺人刀活人劔の心を以て。死罪を宥め。一万石の知行を給り。本の如

く臣下となし給へば。忠真は以の外に。有難き御意を蒙り。頓て御前を下りける。斯て忠真は。内府公の命に依り。漸々一命を助かり。其後は日州野尻の邊に狼狽。やつれ果たる形勢なりしが。穆佐の士押川治左衛門淵脇平馬と打列ね。野尻の原に雉狩りに出けるが。押川一ツの雉子を見掛。狙詰て鐵砲を放せしに。鳥は早く飛去り。誤て忠真の眞向を打通し。駒より眞逆さまに落ちて死たりける。是も忠真が罪科の。天道末だ許さるにや。終りの果こそ恐しけれ。又白石長仙は。忠真に反逆をすゝめし科に依て。隅州始良郡

勝本に於て。獄門に掛られ。其外凶賊残ら。殺されけり。忠真は普代恩顧の長臣として、莫大の御鴻恩を蒙り、御聲でも成たる者なるに。如何なる天魔の入ぬらん。反逆を企。切報の程こそしられける。是に依て薩隅日洲。静謐に治。御代こそ目出度けれ。

若武者

こゝろ。太くも夷等ば。君の恵をよそにして。干名も陸奥の金澤に。干たてこもりたる程もなく。討手の兵は忽ちに

送り越されて一場の、修羅の巻を開かる。矢合せなしつ敵味方。山岳ふるうときの聲。此時味方の若武者に。なるての鎌倉権五郎。手柄の数は今日なりと。花々しくもいでたちて。敵陣ふかく乗入る。敵はすぐれし若武者を。こゝろ悪くや思ひけん。ねらひ違はず一筋の。征矢は左手の目に立てり。されども勝に乗じたる。彼の若武者は其矢の根。抜くひまもなく弓射たる。敵を目蒐けて追かけつ。さへざる雑兵拂ひのけ。切終に敵を獲たりけり。此城攻めに若武者が。雄々しさふるまい轟きて。今に其名も芳ばしく。八

幡太郎義家が。後三年の戦ひの。中にすぐれてたへらる。

薩摩琵琶  
流水吟終

明治三十八年八月十五日印刷  
明治三十八年八月廿三日發行

不許複製

薩摩琵琶歌

編者 津島松溪

發行者 東京市神田區表神保町二番地 福岡新三

發行者 同 日本橋區松島町廿九番地 谷澤光吉

印刷者 同 京橋區南小田原町二丁目十二番地 今井鉄次郎

發行所 光世館 自祐堂

3B-40

